

# こんにちは！ MED 村立東海病院



公益社団法人地域医療振興協会では、東日本大震災で被害が大きかった宮城県女川町の女川町立病院への医療支援を行っています。当院からも、医師1人と看護師2人のスタッフを派遣しました。今回は、支援に赴いたスタッフによるレポートをご紹介します。

## 女川町立病院での診療支援の経験を通して

医師 海老根 廣行

6月上旬に医師として診療支援に行ってきました。女川町立病院の上下水道・電気・ガスは使用可能なまでに仮復旧していましたが、しかし市街は、“全く何もない”という表現が適切です。中心部の瓦礫の撤去は進んでいますが、周辺の集落は手付かずに状態でした。病院の1階部分は津波ですべてを失い、いまだに使用ができない状態です。震災当時は病院機能のすべてを喪失したと聞きましたが、地域医療振興協会の支援物資と人的支援により、診療を再開できるまでになっていました。病棟も外来も、その機能は縮小体制ではあるものの、避難所から多くの方が受診されていました。震災のストレスが原因で体調を崩す方、避難所で広がる感染症にかかった方が多く見受けられました。



海岸側の高台にある、女川町立病院

私の仕事は、外来診療と夜間休日の日直・当直業務でした。震災当時、患者さんは薬や薬手帳をなくし、病院はそのような混乱の中、カルテも薬もない状態で人がや病人の治療を行っていたそうです。しかしながら現在は、すべてにおいて“混乱から安定させる時期”にあると思います。

私が女川町立病院の診療支援で何ができたか——患者さんの健康問題を解決することも大切ですが、現地の医師の疲弊を和らげることができたと思います。医療関係者も被災者であり、当初は無我夢中であつたかもしれませんが、仕事以外にも自分の時間が必要な時期にきていると思います。必死に頑張ることに限界があり、女川町立病院での医療が継続可能であるためにも診療支援は必要であると思います。



病院から見た外の様子。  
今も工事が進められている

今回の経験を通して、東海村や東海病院で同様の被災が生じた場合の事を考えてみました。マニュアルでどうするかではなく、職員一人ひとりの意志・行動が病院の在り様に現れると思います。その時、医療者として、人間としての行動に誤りがなければ良い結果(復旧・復興)が生まれるはずで、皆さんも震災の時、もし女川町の住民であつたら自分は何をするべき人なのかを考えることが大切だと思います。

## 女川町立病院へ看護支援に行つて

看護師 箱田 めぐみ  
看護師 根本 沙織

私たちは5月29日から6月4日までの1週間、女川町立病院へ看護支援に行ってきました。病院に着くと、そこはテレビで報道されているように、辺り一面何もありませんでした。

私たちは外来と病棟業務に分かれ、業務を手伝うことになりました。外来は定期処方も1か月分ほど出すことができるようになったため、比較的落ち着いている印象を受けました。一方、老健病棟は毎日朝7時からの出勤で入所者の食事・排泄介助を行い、また、私たちが支援に行った日から入浴介助も開始になり、より忙しくなりました。お世話をする中で、患者さんからいろいろなお話を伺いました。津波で家がなくなり、今、仮設住宅への入居を申し込んでいる中での健康管理はとても難しいと訴える方、津波被害に遭ってから海に足を向けて寝られないとベッドの位置を変える方、震災後に精神不安定になり精神科を紹介される方等々、さまざまな患者さんがいました。私たちは耳を傾けることしかできません。しかし、そのような患者さんが多くいる中で、今まで治療を拒否していたけれど、震災を期に治療を積極的に受けるようになった方もいました。人間の強さを感じた瞬間でした。

今回の震災は、「大きな津波に見舞われるなど想定外だった」と現地のスタッフは話していました。しかし、私たちはいかなる震災においても、想定内に動けるよう日々訓練が必要です。女川町での支援は心身共に大変でしたが、私たち看護師は、患者さんの安心を一番に考え、行動しなければならないということであらためて学びました。今後の看護に生かしていきたいです。



町は復旧しつつある中、  
まだ撤去できていない車

問い合わせ●村立東海病院(☎282-2188)、保健年金課地域医療担当(☎287-0899)